

# さぬき・東かがわ支部国語部会

さ東・志度中 鏡原貴子

## 1 研究主題

生きて働く力を育む国語教室

～言葉による見方・考え方を働かせ、深まる学び～

## 2 研究活動の概要

(1) 4月26日(金) さぬき南中(支部総会)

- ① 研究テーマ決定
- ② 研究組織編成
- ③ 研究計画作成

(2) 5月30日(木) 志度中

- ① 教材共同研究
- ② グループ協議
- ③ 指導・助言

9月13日(金) 大川中

- ④ 研究授業
- ⑤ 授業討議
- ⑥ 指導・助言

## 3 研究内容

(1)教材共同研究

① 題材「故郷」(3年)

② グループ分け

ベテラン教員と若手教員、別の学校の教員がバランスよく分かれるように工夫した。

③ グループ協議

ア グループ「い」

・「批判」しながら教材を読む、というと悪いところを探して批難するようなイメージがあるが、良いところも含めての「批判」ができるように指導したい。

・「故郷」は明確な主題ありきの小説であるので、その主題をはっきりさせてから、状況設定、山場、まとめ、登場人物を抑える授業展開はどうか。

・この文章のすごさとは、どこか。情景描写や人物設定のうまさを味わわせたい。

・教員の読み方では、「打ちひしがれて～」の部分は現代でいうところの『DVを受けているような将来に希望の持てない子どもたち』、「心が麻痺して～」は『社会と隔絶している人たち』、「やけを起こして～」は『何をやってもうまくいかず、悪いことをしてしまった人たち』のような例が挙げられ、生徒にも分かりやすい表現で言い換えることの大切さに気付いた。

イ グループ「ろ」

・登場人物の変化をしっかりと読ませたい。  
・3年生の集大成である小説教材であり、人権・同和教育の観点でも学ぶべき教材なので、1年生の頃から見通しを持って文学小説を読む技術を身に付けさせておきたい。

・ルントウとヤンおばさんは狭い世界で生きている人たちで、「変われる」ということを知らない人たちの代表である。この二人のように心が壊れてしまわないように、変わっていかなければならない。

ウ グループ「は」

・ルントウと「私」の再開の場面「唇が動いたが、声にはならなかった。」の部分、ルントウを書き手として、リライトしてみる。

・「新しい生活」の部分の解釈として、「疑いのあることがあれば、行動を起こすべきである」「困難な生活をしていても、自分の境遇は変えられる」のように言い換えることもできる。壁にぶつかったとき、社会に出て考えるべきことを教えてくれているのではないか。

④ 指導・助言

細川 昌宏 校長(志度中)

「教材としての読み」と「文学としての読み」

・「文学」を指導するときに、教師自身がその教材に対する「感動」を持っているか？

・教材を教員が読んで、自分がどう思ったのかを生徒に言えた方が熱のある授業を作ることができる。

・「故郷」が3年生最後の長編小説として掲載されている意味を考えてほしい。

・これからの社会を生き抜く中学3年生に考えてほしい教訓も含まれている。

・自分らしく、深く、そして正しく読む技術を全教員に身に付けてほしい。

## (2) 研究授業

### ① 題材 「盆土産」(2年)

### ② 授業者 井上 真帆 教諭(大川中)

### ③ 学習指導過程

ア 「えびフライ」を誰が、どのような気持ちで言っているのかを考える。

イ 「えびフライ」の働きについて考える。

ウ 題材名「盆土産」の意味を考える。



### ④ 授業討議

#### ア 授業説明

「キーワード」から文学作品を読む活動に挑戦した。時間配分が難しく、他クラスでは出なかった「悲しさ」という意見への対応が不十分であったのが反省点である。

#### イ グループ協議

・生徒が複雑に考えすぎていたように思えた。」注目する「えびフライ」を指定してもよかつたのではないかな。

・キーワード周辺の文をしっかりと読ませることが大切なのではないかな。

・題材名の意味を考えるとときには、「お盆」の意味をしっかりと考えさせたかった。「盆」土産であるからこそ、この題材名の意味があり、先祖の存在を生徒が意識することで、父親がなぜ6尾のえびフライを持ち帰ってきたのか、というところにまで考えが及んでいくのではないかな。

・「喜作」が登場する場面では、目に見えて分かる派手さから、喜作の家でも父親からの土産を心待ちにしていたことが分かる。この地域では当たり前の光景なのではないかな。とす

るならば高度経済成長期であったこの時代、この地域の背景をしっかりと、抑えておく必要もあつたのではないかな。

### ⑤ 指導・助言

土岐 浩司 教頭 (志度中)

・単元を貫く言語活動が必要である。本授業の単元名は「人間のきずな」である。どんな活動を通して、本質に迫ることができるか。それを考えて、教師が準備しておいて、生徒の発言には問い返しをすることが重要である。

・本教材では、語り手についてはほとんど情報がなく、本文中の記述から推測することしかできないが、「人物」「背景」「事件」を整理したり記述をヒントに調べたりしていくと、見えてくる。このように謎の多い作品であると、生徒が問いをもつようになる。その興味こそが主体的に学習に向かう態度につながり、また自分で解決する力を育むきっかけとなるのではないかな。

・現代の生徒たちと、この教材の時代の子どもたちとは、大きく違っているため、どう生徒と教材をつなげるかが問題になってくる。今の子どもたちは文字に書かれていない「行間」を読みづらい傾向にあるので、そこを指導していくような方法を模索して行ってほしい。そのためには、教員のより高次の教材研究が求められるのである。



## 4 反省と課題

今年度は、第1回目の研修において会員全員での教材研究を取り入れたことにより、教員同士での学び合いの場を持つことができた。また、若手の先生方だけではなく、中堅・ベテランの教員も全員が学ぶことができ、教材研究への意欲がより一層高まった。来年度もまた、別の教材を用いて研究を続けていきたい。